

No. 199

令和3年3月19日

【発行】

豊橋市立青陵中学校 校長室

t-asai-hideo@toyohashi.ed.jp

Rising Sun



デジタルも、アナログも。

新型コロナウイルス感染症拡大により、デジタル化の必要性がクローズアップされました。デジタル庁の新設、企業のテレワークやリモート会議等々、さまざまな分野でデジタル化の波が一気に押し寄せてきました。私たちが身を置く教育現場も例外ではありません。オンライン授業に始まり、GIGA スクール構想の大幅な前倒し実施など、教育活動のデジタル化も避けて通れない道です。

デジタル(digital)とアナログ(analog)

デジタル(digital)とは「連続的な量を段階的に切って数字で表す」ことを指します。目盛りや指標などを使って一定の数値を表した場合「デジタル」ということができます。

身の回りにはこういったものがあるでしょうか。例としてもっともわかりやすいのは、デジタル時計でしょう。デジタル時計は1秒や1分ごとに数字が切り替わり、現在の時刻をわかりやすく示します。

他にもデジタルはPCなどのデータとしても使用されます。今見ているスマートフォンやPCもデジタル製品のひとつです。音源で言えば、CDもデジタルデータです。

現在コンピュータの主流はデジタルコンピュータであり、デジタルではコンピュータのデータなどを数値として区切ることで正確に表すことができます。コンピュータからコンピュータへ正確にデータを移行することも可能です。

デジタルは「正確」で「切れ目のある」と覚えておくとよいでしょう。

アナログ(analog)とは「データを連続的に変化していく量で表す」ことを指します。長さや量、物質を表すときに使います。区切られることなくゆるやかに止まることなく変化していくものは「アナログ」です。

最もわかりやすいのがアナログ時計です。アナログ時計は短針と長針、秒針で時を刻んでいますが、秒針は常に連続的に動き続けています。数値と数値の間をゆるやかに上昇して温度を示す水銀式体温計もアナログのわかりやすい例として挙げられるでしょう。

デジタル音源の代表がCDなら、アナログ音源の代表はレコードです。

アナログはゆるやかに変化をしていくものなので、1と1の間にある「0.0000001」以下の数値も表すことができます。水銀式体温計の示す温度に切れ目がないように、アナログは切れることがありません。

アナログは「曖昧」で「切れ目のない」と覚えておくとよいでしょう。

<https://news.mynavi.jp/article/より抜粋>

いかにデジタル化が進もうとも、アナログが絶滅することはないと思うのは私だけではないはずです。デジタルにはデジタルの長所があり短所があります。アナログもまた、長所と短所があります。双方が互いの短所を補完し合って、これからも共存していくことは想像に難くありません。

先日、三河教育懇談会顧問・青木宏氏(あおき・ひろみ)先生のお話を聞く機会がありました。青木先生は、「コロナ禍にあってソーシャル・ディスタンス、つまり、人との物理的な距離をとることが定着してきたが、心の距離は遠ざけてはならない。教育において心の距離は、近ければ近いほどよい」というお話をされました。

この話を聞いていて、今年度の修学旅行のテーマを思い出しました。今年度の修学旅行のテーマは「和気藹々～心の距離は密にして～」です。コロナ禍中の修学旅行のテーマとしてよく考えられたテーマだなあと感心しきりでした。特に「心の距離は密にして」は秀逸だと思っていましたが、青木先生の話の内容とぴったり同じです。再度感心してしまいました。

私たち教職員が日々接しているのは、生身の人間です。デジタルを創り出したのは人間ですが、もともと人間は、正確で切れ目のあるデジタルなものではなく、曖昧で切れ目のないアナログなものだと思います。

令和3年度、児童生徒一人一人に1台のタブレット端末が貸与され、とよはし版 GIGA スクールが本格稼働します。児童生徒の学びにデジタルが一気に入り込み、授業風景が大きく変わろうとしています。教育のデジタル化は、時代や社会のニーズでもあり、これからは積極的に取り入れていかなければなりません。しかしながら、人と人との関りは、デジタル化してはならないと思うのです。いかに時代が変わろうとも、アナログな部分は残さなければなりません。皆さんはいかがお考えですか。教育現場における感動や感激は、アナログ>デジタルだと思います。